

要 旨

藤原定家による『百人一首』再解釈論

——英訳を通して見る定家の解釈——

カーロイ・オルショヤ

本論は、『百人一首』の所収歌を外国人、あるいは翻訳者の視点から再解釈したものである。本論においては、1865年の初英訳の発表から多く作成されてきた外国人、または日本人による英訳を分析し、『百人一首』所収歌の再検討を行った。本研究の目的は、『百人一首』所収歌の英訳を分析することにより、歌が秘めている、従来と異なる解釈を浮き彫りにすることである。現在まで曖昧なまま放置されていた問題が多くあると考え、翻訳上、あるいは翻訳を考慮すると初めて気づく問題も多くあると考えた。そのため、過去に作成された多くの英訳を分析すれば、日本語のままで考えると気づかなかつた問題が明白になり、それにより、かえって撰者であるの藤原定家の解釈に近づくことができると期待される。

『百人一首』所収歌を解釈する場合、翻訳の視点も含め、次の解釈が考えられる。①作者の解釈、②勅撰集の撰者の解釈、③定家の解釈、④定家以前、あるいは同時代の人々の解釈、⑤後世の人々の解釈、⑥翻訳者の解釈、そして⑦翻訳を読む読者の解釈。『百人一首』研究においては論者が初めて⑥と⑦を研究対象に加え、③定家の解釈との比較を行った。こうした研究方法は、『百人一首』の新たな解釈に次のように繋がった。以下、章毎に紹介する。

第1章は「序論」として本研究への経緯、『百人一首』再解釈の意義、論文の研究方針、そして本論のコーパスを成している英訳を紹介した。それに続けて、第2章「ローマ字表記からみる枕詞の清濁問題」においては、枕詞表記の清濁問題を取り上げた。日本語の場合、漢字、あるいは仮名で文書が表記されている。古文において長い間、濁音は表示されることがなく、そのため後世の人はかつてそれが清音で発音していたか、濁音で発音していたか、必ずしも確定できないことがある。これは、アル

ファベットを使っている言語の母語者にとっては奇妙な特徴である。なぜならば、アルファベットの場合、一つ一つの文字が一つの子音、あるいは母音を表しているからである。清音と濁音も別々の文字で表記される。例えば、「ぶ」が「b」と「u」の二文字になり、「ふ」が「f」と「u」の二文字になる。日本語で濁点の有無が曖昧な表記がアルファベットの場合、清音と濁音が完全に別の文字になっているので、日本語の仮名表記と比べて違いがより明白である。このため、『百人一首』のローマ字表記には原典の表記の問題が表出することになる。そこで本章では『百人一首』の二つの枕詞「ちはやふる／ちはやぶる」と「あしひきの／あしびきの」を取り上げ、英訳のローマ字表記と先行研究を比較しながら、『百人一首』の撰者である藤原定家の解釈として清濁どちらがふさわしいかについて考察した。日本の研究史と英訳のローマ字表記を調査した結果、両方の表記が濁音になっていたことが明らかになった。しかし、「ちはやふる」の場合、定家が濁音ではなく、清音で表記していたことが判明した。日本人による英訳の表記にその正しい表記が残っており、研究史においてどの時点で表記が濁音になったかも明らかになった。

第3章は「題詠と詠歌主体の性別」においては、男が女の立場で詠んだ歌を対象とした。和歌の場合、詠歌主体の性別を示している表現はほとんど使われておらず、詠歌主体の特定が困難である場合が多い。英訳の場合、詠歌主体の相手を表現する時に、言語上で「he」や「she」などの、性別を明確にする代名詞を使わざるを得ないケースがある。そのため、歌を英訳することで性別を具体化することにより、日本語では曖昧であった問題点を浮上させる。これを起点にして、『百人一首』所収歌である「あしびきの」歌が女性の立場で詠まれた歌であることについて考察した。英訳で性別が具体化され、それが歌のイメージに影響するという起点から、『百人一首』の3番の詠歌主体の性別を分析したところ、『百人一首』所収歌として解釈する場合、女性の立場で詠まれた歌として解釈する必要があると結論付けた。

第4章は「英訳からみた修辭法の再解釈」である。本章においては、『百人一首』の序詞と掛詞を探った。序詞は「浅茅生の小野の篠原」を取り上げた。参議等のこの歌は、英訳と現代の日本の解釈書で異なる解釈がされていることをきっかけに「浅茅生の小野の篠原しのぶれどあまりてなどか人の恋しき」の序詞と主想の関係について考察した。一般的に序詞と主想の関連に音声的な、同音反復関係のみが認められているが、意味的な関連に関しては、古注釈においても、現代の先行研究においても意見

が分かれている。そこで意味的な関連に関して英訳で最も多く採用されている解釈が定家解釈として可能であるかを探った。等歌と同類の歌を検討した結果、定家解釈としても、英訳で用いられている「浅茅生の小野の篠原」と詠歌主体の恋心の比喩関係が可能であると結論付けた。日本で忘れられつつあった解釈を、英訳の検討を通して再確認できた。

掛詞は「さよふけて」を取り上げた。『百人一首』においては、「さよふけて」は2首に詠まれている。94番の歌の場合、掛詞とみなされているのに対し、59番歌の場合、時間経過表現のみとされている。そこで59番歌の場合も掛詞としての解釈が可能であるか否かを考察した。新しい翻訳を目指し、歌の表現を検討する翻訳プロセスの中、59番の歌と94番の歌の同類の表現に関して疑問が生じる。それは、94番の「さよふけて」が掛詞とされるようになったのであれば、59番の歌も同様な解釈が可能ではなからうかという疑問である。定家の同類の歌を分析した結果、従来掛詞とされていなかった59番の歌でも、定家の解釈では、「さよふけて」に時間経過を表している以外の意味も含まれている可能性があることが明らかになった。

第5章は「時間表現・情景表現による場面設定 — 「有明 (の月)」と「暁」、「朝ぼらけ」のイメージの再検討」である。『百人一首』のこれらの表現についての時間・情景表現の研究は、現在まで概括的な視点に留まっており、一首一首の具体的な解釈に及ばなかった。しかし、英訳をする際、一首一首で曖昧だった表現を訳者が具体化していく。そのプロセスの中、原点とのずれが生じかねないが、そのずれを分析することにより、原点の解釈でどういったところを再解釈する必要があるかもみえてくる。本章では一首毎の表現の時間・情景の幅の確定を目標とした。時間・情景表現は英訳においての明るい方への傾きが、日本の研究での解釈の問題点を明らかにした。特に「有明 (の月)」の場合、「夜が明ける」時間帯として説明されていることが、英訳に影響したと考える。このように、日本の研究が英訳に影響していると同時に、英訳の分析が、日本においての研究で更に議論をすすめる必要がある点を明らかにすると結論付けた。『百人一首』の場合、一首一首の歌を藤原定家が解釈したように捉える必要がある。以上の考察を通して、英訳の分析も定家解釈に繋がると結論付け、調査した歌の、従来の研究でされていなかった解釈にたどりつくことができた。

以上のように、英訳を通して『百人一首』の再解釈を行った。『百人一首』の英訳は数多く作られている、その訳には時代ごと、または訳者によって格差がある。これ

らの多様な翻訳を分析し、比較すると『百人一首』の新たな解釈・深読みにつながる
ことが明らかになった。第2章においては、日本人による翻訳のローマ字表記が残
されたことが明らかになり、第3章においては、定家解釈としての詠歌主体の性別
を理解するため、英訳の分析が有利であったと分かった。第4章で序詞と主想の関
係が英訳において、日本で忘れつつあった解釈が英訳で確認できた。掛詞の場合、翻
訳プロセスの中で、新たな意味が浮上してきた。なお、第5章においては、英訳の
場面設定の分析が原典の場面設定の再解釈に繋がった。以上のように、本論では初め
て定家の解釈と翻訳者の解釈を比較研究し、英訳の分析が定家の再解釈に有利である
ことが明らかになった。本来の和歌翻訳は一般的な解釈のまとめに留まり、翻訳プロ
セスの中で浮上した問題から作品の再解釈を行うことは手薄であった。しかし、従来
の研究方法を改め、和歌を考え直すと、新たな解釈に繋がると本論で明らかになっ
た。